
ばうんていくえすとのーぶあ

さる たま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばうんていくえすとのーぶあ

【Nコード】

N5448Z

【作者名】

さる たま

【あらすじ】

これは、まだ賞金稼ぎに成り立ての少年の物語。

ある日、彼は人気のない荒廃した都市に迷い込む。その廃墟の一角で彼が見た物とは？ そして 今、少年と少女、初心で無垢な二人のちよっぴり切ない珍道中の幕が開ける。

序幕 黄泉の都の眠り姫（前書き）

どもども、初めまして。作者のさる たまと申します。

この物語は、さるがとあるブログサイトで執筆している「ばうんていくえすと」という小説のスピノフ作品です。

あちらの主人公達は名だたる賞金首を捉えた凄腕コンビなのですが、こちらでは逆に「賞金稼ぎに成り立ての新米コンビ」を主役に物語を展開させていく予定です。ええ、あくまでも予定ですが……

（何）

さてさて、駆け出しの少年賞金稼ぎトマスと謎の少女ニードの繰り広げる、ちゃっかりダークな異世界SFファンタジー「ばうんていくえすと」の「ぶあ」を、ぜひぜひ御楽しみ下さいませ！

さる

序幕 黄泉の都の眠り姫

序幕 黄泉^{よもつ}の都の眠り姫

そう、それは偶然の出来事に過ぎなかった。

少なくとも、彼は未来を予知するような高度な学術^{がくじゆつ}を身に付けているワケではないし、駆け出し同然の彼の稼ぎでは、到底その手の科学技術の入手など不可能に等しかった。

だからこそこれは予測でも予知でもなく、周りに誰もいない不安を紛らわすための悲しき願望と廃墟という冒険心をそそられる場所でほんの少し湧き上がった「怖いもの見たさ」という名の好奇心に駆られて湧き上がった淡い期待による、何の根拠のないただの妄想。それらを勘違いして「ここに行けば何かがあるかも」と思いこみ、足を踏み入れたに過ぎない。

「出逢いの予感」と決めつけて

しかし「運命の悪戯」という、この上なく非科学的な言葉を信じさせるには十分過ぎるほど、都合良く彼の予感が的中した。

偶然もここまで積み重なれば、それは必然になるのでは？

そうとしか思えないような光景が、目の前にあるのだから仕方がない。

古びた学堂の地下深く、その最奥の部屋の扉を開けた瞬間、両の眼に焼き付いた不思議な物体。

あれは何と表現するべきだろうか？

何かの液体で満たされた、巨大なガラスの球体。よく見ると、それはフラスコのような形状だった。球体の頭の先が細く伸びた筒状になっており、その先に太い配管が伸びている。問題なのはその中身だ。

培養液の中、薄紅色のふわふわと舞う髪と白雪のような肌をした『フラスコの中の少女』は、膝を抱えながら産まれたままの姿で気持ちよさそうに眠っていた。

まるで、白馬に乗った王子様を待つ眠り姫のように。

序幕 黄泉の都の眠り姫（後書き）

どもども、さるです。

皆様、この度は『ばうんていくえすとのーぶあ』をお読み下さり、誠にありがとうございます。

さてさて、今回は初投稿ということで、右も左も分からぬままプロローグらしきものを書いてみましたが如何だったでしょうか？

いきなり怪しげな場面から物語が始まりましたが、彼が迷い込んでしまった場所では、一体何が行われていたのか？

そして、そこで「出逢った」少女の正体とは？

ーといったところで、次回へと続く……………かもしれません（汗）

えっとまあ、行き当たりばつたりな作者ですが、これから温かく見守って頂けますよう、どうか応援よろしうm（――）m

追伸：諸々の事情により、「序章」を「序幕」と変えさせて頂きます。

さる

第一幕 絹布の都の夢追う傭兵（その一）

第一幕 絹布シルクの都の夢追う傭兵つわもの

初雪にはまだ少し早い山間の鉄の道を、だらだらと歩く二つの人影。

一つは中背よりやや小柄な少年のもので、鎧の左右が上向きに曲がった開拓者の帽子を目深に被り、黒い革ブーツを引きずるような草臥れた足取りでレールの間の砂利を力なく蹴り進む。耐熱性のある火竜燐のジャケットの下に赤い襟付きのシャツとダークブルーのインナーを着込み、腰の下まである牛革袋タウロスサックを右肩に掛け、首元に分厚いゴーグル、そして両の腰にはそれぞれ長さの違う二丁の拳銃リボルバーをぶら下げている。

いま一つは彼よりも頭一つ分ほど高い少女のようで、深紅の長い髪を右で束ねてその上下を戒めるように紋様入りの黄色いリボンで結んでいるのが特徴的だ。膝元まで折り曲げたベージュのズボンを履いて白いブラウスの上に羽織った赤い山羊革のベストまでは如何にも旅人らしい格好ではあるが、フリル付きの紺のネックチョーカーとリストバンドがいささか浮いていて、見る者に奇抜な印象を与えるだろう。もつとも、今はそんな心配をする必要は在るまい。隣を歩く少年の他は、周囲に誰かいる気配など微塵も無いのだから。

北から、すうっと流れて来る風が肌に凍みる。

行き先は鉄の道の終点シルクガーデン つい十五世紀頃まで栄えたという山岳の王国シルク朝ムールの王都があった場所だ。

「しっかし、後どのくらい歩くんだろうなあ？ 『絹布こゝろの都』 ってのは……」

少年が気だるそうにぼやいた。

「そおーだねえー。それよりトマス、ニードおなかすいたよおー」

隣で、右手に持った布袋を振り回しながら適当に相槌を打つ少女。
トマスとは、少年の方の名だ。その彼が、彼女　ニーダと名乗
る少女の手にした袋を指して問う。

「……………お前、二言目にはいつつもそれだなあ……………もう少し我慢
しろよ、俺だって早く飯にあり付きたいってのに。大体、その袋ん
中の缶詰空にしたの誰よ？」

彼女は口元に入差し指を当てながら少し考えて、それから自信満
々にこう答えた。

「ニーダとトマスだね！」

「いやいや、お前がほとんど食いまくってたじゃん！　俺が態々移
動日数と在庫から一日の食糧計算してたってのに、それガン無視し
てくれたのお前よ。オ・マ・エ！」

「そおーだったっけ？」と、まるで他人事のように返すニーダ。

「軽っ、何その反応。今、俺らの食糧危機について話してんの。言
わば死活問題よ、解ってる？」

「だから、はやくゴハンたべにいこうよおー」

「だああああああ、その飯食う資金も宛てもねーだろう！　そ
もそも、ここドコだと思ってるの？」

そう言われてニーダは辺りを見渡すが、あるのは険しい山の岩肌
と遠くで生い茂る森の木々、そして薄らと青白い冬の空が高く延び
ているだけ。

「はやや、ココどこトマス？」

「いや、俺が訊いてんだっての……………はあ、もういいや」

心底疲れ切ったように呟くトマス。

実際、疲れてはいるのだろう。周囲の目が無いのを良いことに、
その場でしゃがみ込んで鉄の道のレールの上に腰を下ろす。

鉄の道は『大陸』^{スチームレール}の遠方都市間高速移動のために敷かれたもので、
本来なら蒸気列車がその上を走っている。だが、この付近は元々交
通の便が悪く、『絹布の都』^{絹モ}として隆盛を誇った頃はそれこそ上質
の絹を求めて行商人が東西の様々な物品を持って行き交い「大陸流

通の要所」とまで呼ばれたものだ。が、そこに行くためには東西に広がる砂漠をラクダに跨がって通らなければならず、更にそこからこの渓谷を越えねばならなかった。

しかし、ここ四半世紀の間に急速に近代化が進むと『大陸』中央周辺に鉄の道が敷かれるようになり、交通の問題その物は改善されはした。だが、同時にその近代化によって西方で人工繊維を生み出す技術が普及するや、瞬く間に流通都市としての需要を失っていった。それからは緩やかに過疎化が進み、かつての面影を偲ばせる建物がわずかに残っているくらいだという。

今では貨物用にしか使われなくなったこの鉄の道が、その衰退の歴史を物語っていた。

「おなかすいたあ」と、力なく呟くニーダ。

「ああ、そだなー」と生返事してから、トマスは何気無くサツクの中を探る。すると何かの手応えを感じたらしく、それを掴んで中から取り出してみた。

手にしたそれは四つ角の丸い硝子瓶だった。真ん中の薄茶色したラベルには「円で囲まれた六芒星の上に交差する剣と銃」が描かれている。

大陸ハンターズギルド この『大陸』バウンティハンターの賞金稼ぎを管理する国
際機構の紋章だ。

まだ未開封なのか、中には色とりどりの飴玉がぎっしりと詰まっていた。

トマスは瓶のコルク栓を抜くと、一粒摘まんで「ほれ」とニーダに手渡す。

「わーい、飴さんだあー！」

「こいつは『ギルド』支給のモンだから、しっかり味わって食べよ」
言ってから、彼も一粒口に頼る。

空腹のためだろうか、たかが飴玉一つでもこれ程有難い物はないとばかりにゆつくりと味を噛みしめる二人。

舐めながら、独り空を見上げると、トマスは物想いに耽り始めた。

絹布の都の夢追う傭兵（その二）

俺ら、何しにこんな人気の無いトコまで来てんだっけ？

思えば、路銀が底を付きかけたんでちよつとばかり金になるシゴト探してたら「この先のシルクガーデンまちって都市に、高額賞金首程ミリオンバウンティではないがそこそこの手頃で稼げそうな賞金首の根城がある」って話を聞いたモンだから、遠路遙々歩いて来たんだよねー。

良い稼ぎになるって話だったのに、せつかく飯に困らないだけの金が入る筈なのに、非常食を食い尽くして賞金首おめあてにすらありつけないで飢え死にとか、笑い話にもなんねえよねー。

嗚呼、早いトコたらふく飯食いてー。せめて、今くらい腹膨れたら幸せかなあ……………って、あれ？

……………そう言えば、なんか腹一杯になった気がする……………

「気の所為か？」と、トマスは思いつつも、なぜだかこの一粒で空腹感が充たされた気がしていた。

いや、トマスだけではない。隣にいる大飯喰らいもどうやら満腹ニーダ感に浸っているらしく、眠たそうに目を擦り始めた。

別に睡眠薬が仕込んである訳ではない。それなら、トマスにも睡眠魔が襲ってきてても良いものだ。もっともトマス自身、少しだけだが眠気を感じるものの、それは満腹の際に生じる二次的なものだろう。第一、

『ギルド』が、んな物騒なモン渡すか？

そう考えてトマスはふと、瓶の裏側のラベルを確認する。そして、詳細に書かれた説明を読んで……………思わず表情かおが固まった。

説明文には『一粒で一食分の栄養と満腹感を得られます』などという見るからに怪しげな文章があったが、それよりも彼の目に留まったのは別の一行文である。

凝視する先には、こう記されてあった。

開発元 アマタニア都市学院

「げっ、こいつ都市学院アカデミア製かよ。道理で……」
そうぼやきながらも、トマスは妙に納得した表情を浮かべる。

「そういえば、最近『学会』の推進で携帯食糧の研究してるって聞いてたけど、こいつもその一つなワケか？」

瓶を上に掲げながら、誰ともなく呟くトマス。と、そこで初めてラベルに書かれた品名が目に入る。

スリムボン
万仙丸

胃の中で消化させることで、一粒に凝縮させた各種の必須栄養素を体内に循環させるのと同時に満腹中枢を刺激する作用もあるらしい。が、当のトマスがそんな飴玉の仕組みまで気にすることも無く、単なる便利な非常食程度のモンだろうと解釈すると、さっさと瓶をサックに仕舞い込んだ。

「さつてと、俺も少し休んで行くかな？」

独り呟きながら、隣で気持ちよさそうに寝息を立てている少女の頭をそつと撫でる。

綺麗な琥珀色の瞳は今は両の瞼に隠れている。頬にかかった髪の毛を指で軽く払ってやると、ぷつくりと柔らかそうな唇から小さく洩れる吐息が手の甲に当り、少し、意識してしまった。

やば、ちよつと可愛いかも……

「……って、何考えてんだ俺は？」

波打つ心臓の音が、妙にはつきりと聞こえてくる……ような気がした。

「ちよつとだけなら……いい、いいよな？」

ごくり、と喉を鳴らしながら呟く。視線の先には、柔らかそうな件の唇。

彼は、ゆつくりと、ゆつくりと、顔を近付けていく。ほのかに甘い匂いが香ってくる。

あと、ほんの少し、わずかに暖かな空気が口に当る距離まで近付き……そこで、どこからか汽笛のような音が聞こえた。

ああ、近くで列車でも走っているのかなあ……

「……って、ちょっと待て！」

叫ぶや否や、慌てて顔を上げるトマス。

見つめる遙か前方、陽炎の向こうに黒い小さな点のようなものが徐々に大きくなっていくのが解る。

その黒が予想通りの形を取り始めた頃には、彼は少女の肩を掴んで揺さぶり始めていた。

「お、おいニーダ、起きろっ！」

「むにやにやあゝ。トマスうゝ、どおーしたの？」

「バカ、『むにやにやあゝ』じゃねー。今すぐここから離れるぞ！」

「はにや？」

「だから『はにや？』でもねーよ！　だあああゝ、もう焦れつてえ！……！」

言っが早いのか、トマスは立ち上がってニーダの手を引いた。その時だ。

まるで唸り声をあげるように、近くで蒸気列車が激しく汽笛を鳴らしたのは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5448z/>

ばうんていくえすとのーぶあ

2012年1月5日21時52分発行